

様式 7-1

平成18年度開始 交付金プロジェクト研究課題 事前評価結果

課題名：人と自然のふれあい機能向上を目的とした里山の保全・利活用技術の開発

主査氏名（所属）：関西支所長 河室公康

担当部署：関西支所、多摩森林科学園、東北支所、森林管理研究領域、北海道支所、四国支所、九州支所

参画機関：兵庫県農林水産技術総合センター

研究期間：平成18～20年度

1. 目的

近年、環境保全や環境教育の観点から里山が再認識され、その保全再生活動も盛んである。そして、活動に取り組む住民や行政体から、里山を余暇や環境教育などの目的で活用し、保全するための情報やプログラム、社会的制度・方策の整備が要望されている。これらの要請に応えるため、本プロジェクトでは、里山の利活用手法と環境教育システムの開発を、自然科学・社会科学双方の研究課題を設定して行う。

2. 終了時に得たい成果

本プロジェクトでは、以下の成果を予定している。

- ・里山の利用形態の違いによる生態系予測モデルを開発する。
- ・里山林の人と自然のふれあい機能を向上するための保全・整備技術を開発する。
- ・余暇や環境教育の場として里山を利活用する手法を開発する。
- ・里山の保全・管理を支援するために必要な社会的な制度・方策を提案する。

これらの成果を、自治体などの行政サイドやNPOなどの市民へ提供することにより、里山保全活動の立ち上げや改善を支援する。

3. 評価委員の氏名（所属）

山下宏文 氏 （京都教育大学教育学部教授）

柴田昌三 氏 （京都大学大学院地球環境学堂助教授）

4. 評価結果の概要

山下宏文氏：社会的要請があり研究意義は高い。里山の生態的側面と社会的・文化的側面を両輪とした研究にしてほしい。科学的知見にもとづく「里山」の森林環境教育を構築してほしい。文化的・社会的観点からの森林環境教育のプログラムやカリキュラムの開発に期待する。厳しい達成目標ではあるが、ゴールを明確にして、4課題の連携を強化する必要がある。

柴田昌三氏：里山の再生に関する研究計画のシナリオ、目標設定は順当である。しかし、研究計画の年数が短いことから、とりあえず実行可能なことのみ掲上していないか。その結果、各グループ間の関係性が希薄に見える。里山問題は短期の研究では十分に解明できない部分が多い。成果を挙げるためには、より長期的な研究計画の中での位置づけが必要。また、里山維持の継続性を考えると経済的資源利用の視点も今後必要である。

5. 評価において指摘された事項への対応

実施課題間の成果の受け渡し、相互活用を整理して計画書に記し、連携を明確にした。